

# 往生淨土

寺川俊昭

## 一

親鸞開顯の仏道である浄土真宗が、浄土教の伝統に連なる自覚道である限り、往生浄土は真宗教学における最も重要な主題の一つであることは、論をまたない。その往生についての了解の衰弱と混乱を、早く曾我量深は真宗教学の混乱と指摘し、悲歎していたのであるが、近年、岩波書店刊行の『仏教辞典』においてなされた「往生」の解説をめぐって、その不適切であることを指摘しての本願寺派当局からの訂正要請があり、往生をどのように了解すべきであるかということが、あらためて虚心に問うべき課題として、われわれの前に迫ってきた感が深い。

往生理解の問題点を明確にするために、まず岩波版『仏教辞典』の解説をみよう。

### 「親鸞」の項

他力信心による現世での往生を説き、他力信心は如来から与えられるものとした（不回向）。  
（四七四頁）

### 「教行信証」の項

無量寿経を唯一の根本聖典とし、教、行、信、証、真仏土、化身土の構成で、この世での往生成仏を説いた。

これに対して本願寺派当局は、同派総局公室長名をもって岩波書店社長に宛てて、この解説は「教学研究はもとより、伝道活動に支障をきたし、看過いたすことはできません」という理由で、その訂正と削除を要請した。事の経緯は『東方』第五号に、この辞典を監修した中村元が、「極楽浄土にいつ生まれるのか?——『岩波仏教辞典』に対する西本願寺派からの訂正申し入れをめぐる論争——」に整理して報告しているので、私はいま、この『東方』の文章によって問題を承知しておきたい。

ここにあげた二つの解説について、本願寺派が提出した訂正要請の中で、注意しておきたい見解のみを、以下に引いてみよう。

## 2. 訂正・削除についての要請

「親鸞」の項においては、現世においては往生が定まるのであって、決して現世において浄土に往生するのではないということを明確にして下さい。

「教行信証」の項においては、「この世での往生成仏」という記述を削除して下さい。

## 3. 疑義の理由

① 親鸞聖人が、「他力信心による現世での往生」を説き、「この世での往生成仏」を説いたとの記述は、前者は穏当を欠く表現であり、後者は間違った表現であります。すなわち、親鸞聖人が説いたのは、現生に正定聚の位（「ワウシヤウスヘキミトサタマルナリ」「カナラスホトケニナルヘキミトナレルナリ」と左訓されており、往生・成仏が決定した位）となり、命終わって浄土に往生して直ちに成仏する、というものであります。

③ なお、親鸞聖人には、「信心をうればすなわち往生すといふ」という言葉がありますが、これに基づいて、親鸞聖人の往生思想には、現世での往生も含まれるとの学説も一方に存在しますが、また他方には、親鸞聖

人は現世での往生は説いていない、との説をとる学者も多数存在しています。先の「信心をうればすなわち往生すといふ」という言葉は、『無量寿経』下巻に出る「即得往生」という言葉について、この言葉を正定聚の位に入る意味と解釈されたのであり、親鸞聖人が、「往生」の概念規定をされたのではなく、經典の言葉を解釈された解釈例であります。

「他力信心による現世での往生を説き」という簡単な記述で、一方の説のみしか存在しないかのごとく記すのは、不適當であると言わざるをえません。〔『東方』第五号、一九五―六頁〕

この訂正要請が公にされるや、『辞典』の解説とこの要請について、賛否さまざまの見解が、書店あるいは監修者に寄せられたようである。それを配慮してであろうか、『辞典』の第二刷では「親鸞」の項の前記の解説のあとに、次のような解説が追加されている。

なお、親鸞の往生・成仏思想について、浄土真宗本願寺派や高田派の教義では、命終わって浄土に往生し、ただちに成仏すると説く。

また真宗大谷派では、信心決定後の生活が往生であり、その帰着点が成仏であると説く。

さらに親鸞の難思議往生Ⅱ成仏には、

- ① 死と同時に成仏、
  - ② 臨終一念の夕に成仏、
  - ③ この世で心が成仏、
  - ④ この世で成仏、の四つの時期が見られる、
- とした上で、④を重視する近年の学説がある。

ここに表明されている往生理解の適否について、その論評をすることは、いまは差し控えておこう。ことに本願寺派

の見解については、真宗を代表する有力な伝統であるから、そのような往生理解が本願寺派の公的見解としてあることを、一応承知しておくにとどめたい。ただしその中で、親鸞がこの世での往生成仏を説いたとする『辞典』の見解は、本願寺派の指摘をまつまでもなく、完全に誤りであって不適切であるから、私もまたこの見解はとらない。

## 二

われわれの関心は、親鸞が形成しかつ保持した独自の往生理解を正確に学び知ることである。往生はいうまでもなく、浄土教と共に古い大切な主題である。浄土教の長い歴史の中で、往生についてはさまざまな、幅広い了解が展開されている。決して一義的に明確な主題ではない。事は、親鸞が生きた時代にあっても、現在とはほぼ同様であったと考えられる。そのためにであろうか、親鸞はその晩年に、往生についての多義にわたる了解を吟味して、仏道としての往生を明確にすべく論文を執筆した。八十三歳のときその略本が執筆され、八十四歳のとき作製された『往相回向還相回向文類』を経て、八十五歳のとき完成した『浄土三経往生文類』がそれである。

この論文において親鸞は、往生についての独自の了解を凝集的に表明した。そしてその已証の往生観を、周知のうちに「大経往生」もしくは「難思議往生」ということばで表明している。それで、われわれも親鸞に従って厳密な意味で往生を語ろうとするとき、漠然と往生をいうのではなく、このことばを使用して親鸞の知見に従うべきであろう。さて「証卷」はその標拳に、「難思議往生」を掲げている。その端的な内容を、私は『浄土三経往生文類』の論述を併せ考えて、「証卷」が真実証の具体相として述べる、次の自覚道として承知したい。

しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る。

これに呼応して、「真仏土巻」に親鸞は、往生浄土について次のような考察をめぐらしている。

（『真宗聖典』二八〇頁）

真土と言ふは、

『大経』には「無量光明土」と言えり。あるいは「諸智土」と言えり。

『論』には「究竟如虚空、广大无边際」と曰うなり。

往生と言ふは、

『大経』には「皆受自然虚無之身無極之体」と言えり。

『論』には「如来淨華衆、正覺華化生」と曰えり。

または「同一念仏して無別の道故」と云えり。

また「難思議往生」と云える、これなり。

（『真宗聖典』三三三―三四頁）

これに加えて親鸞はさらに、『大経』願成就の文に説かれる教言、「即得往生」について、二つの『文意』に次のような解説を行っている。

「即得往生」というは、「即」は、すなわちという、ときをへず、日をもへだてぬなり。また「即」は、つくという。そのくらいにさだまりつくということばなり。「得」は、うべきことをえたりという。真実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御こころのうちに摂取して、すてたまわざるなり。「摂」は、おさめたまう、「取」は、むかえとると、もうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき、日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり。

（『一念多念文意』（『真宗聖典』五三五頁）

「即得往生」は、信心をうればすなわち往生すという。すなわち往生すというは、不退転に住するをいうなり。不退転に住すというは、すなわち正定聚のくらいにさだまるとのたまう御のりなり。これを「即得往生」とはもうすなり。「即」はすなわちという。すなわちというは、ときをへず、日をもへだてぬをいうなり。

（『唯信鈔文意』（『真宗聖典』五四九―五五〇頁）

これらの文意はまことに明瞭であって、ほとんど誤解の余地はない。すでに指摘したように、『浄土三経往生文類』にいう「大経往生」が、親鸞がその已証としてもった独自の往生観であるが、その知見を十分に学び知るために、上記の諸文は当然われわれは承知しておくべきであろう。

すくなくとも先ず注意しておくべきこと、それは「往生」は必ず「往生浄土」であり、いわば往生浄土の主體的側面が往生であり、その容体的側面が浄土であるということである。だから往生の了解は、浄土の了解と切り離すわけにはいかない。親鸞は当然のこの視点に立つて、ここに引文した「真仏土巻」の論述において、まず「真土」を問い、それを異訳の『大経』によって端的に「無量光明土・諸智土」と示し、さらに『浄土論』の「究竟如虚空・広大無辺際」すなわち量功德を表すことばによって、その意味を補完して示している。無量光明土とは、文字どおり限らない光の世界ということであるから、量功德を表す『浄土論』の教言と併せ考えて、浄土を例えば「他世界」もしくは「他界」と類同する、実体的に存在する世界と了解するのではないという、親鸞のいかにも仏道の基本的知見を踏まえた浄土理解が、端的によく示されている。当然われわれが親鸞に従って浄土そして往生浄土を尋ねるとき、例えば他世界への転生と区別できないような、通俗的通念を前提にしてはならないのであり、むしろそれを破るような往生理解をもつことが、期待されているというべきであろう。

のみならず親鸞は異訳の『大経』によって、浄土を「諸智土」と聞き取っている。この浄土観を正依の『大経』によって表せば、あの美しい「東方偈」の教言が、すぐに想い起こされてくる。

如来智慧海 深広無涯底

二乗非所測 唯仏独明了

その意味するところは、容易に了解できる。浄土は何よりも、如来の智慧の境界である無上涅槃の世界であり、もし

くは無上涅槃の功德のはたらいっている境界ということである。『浄土論』のあの量功德を語る教言は、おそらくは『大経』のこの偈頌の教言を継承したものであろうが、「真仏土巻」で親鸞が『浄土論』の第一偈を引いてはつきり示しているように、親鸞が注意深く「真仏土」と語る真実の浄土とは、何よりも先ず帰命尽十方無碍光如来の信に自証される尽十方無碍光の世界、すなわち無量光明土である。いわば信心において初めて開示され、触れられ、そして仰がれる廣大無辺の光の世界である。してみると浄土を無量光明土として示すのは、いかにも体験的な浄土の表明であることが知られる。

これだけでもわれわれは、浄土をいわゆる実体的な世界と理解する見解を、虚妄の見として破らなければならない。このことをさらに強調して親鸞は、「観彼世界相、勝過三界道」という清浄功德を表す教言を、一心帰命の信の表白と一連のものとして引文している。無量光明土として自証され体験される浄土は、無上涅槃の功德のはたらく境界として、より深められた形で自証され、証知され、そして自覚される世界である。流転の世界としてあり、生きられ、しかしながら「苦悩の旧里」として固執されている「この世」の延長上に空想される「あの世」として、浄土を了解してはならない。流転が転ぜられ、苦悩が寂滅する清浄業処すなわち清浄真実の無上涅槃の功德がはたらく世界として、浄土は開示され自覚されるのである。このように、いかにも重厚にそして具体的に、親鸞は浄土を体験的には無量光明土として、そして自覚的には諸智土として了解していくのである。

浄土がこのように基本的に無上涅槃の功德界として教示されていることに開眼した親鸞にとって、往生とは何よりも先ず、無上涅槃の証得を意味する。「往生と言うは、『大経』には「皆受自然虚無之身、無極之体」と言えり」との引文から学び取った知見が、それである。『浄土論』の教言から学び知られる知見もそうであって、浄土の衆生は如来の正覚すなわち無上涅槃の証りの中にあるというのであり、これはすべて安楽浄土の徳というべきものであろう。それについて十分に注意すべきは、親鸞が『浄土論』のこの眷属功德を語る教言を註釈する曇鸞の見解を、併せ引き

ていることである。「同一念仏無別道故」という引文の教言は、もちろん「遠通、夫四海之内、皆為兄弟。眷屬無量」と続く。曇鸞がこの教言で語り告げていることは、同一に念仏する一道に立ったとき、そこに「四海のうち皆兄弟とする」という形で、浄土の眷屬功德が現生にはたらき出るということであり、念仏の一道において浄土の眷屬功德が、同朋の交わりの実現という形で現生に自証されるということである。曇鸞の教言がもつ積極的意味をこのように了解するならば、善導の「難思議往生」に託して親鸞が語り告げようとしていることも、現生に浄土の眷屬功德を自証するという内容をもって生きられ、やがて無上涅槃の証りに究竟していく、念仏に立つての自覚道ということであるに違いない。そしてこのように了解することが、先に一言したように、「証巻」で難思議往生を真実証の具体相として述べる知見と、よく相応するのである。

### 三

親鸞は『浄土三経往生文類』において、その已証としてもった独自の往生理解を、「大経往生」として主題的に次のように述べる。

大経往生というは、

如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり。

これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらいに住して、かならず真実報土にいたる。

これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆえに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大経』の宗教とす。このゆえに大経往生ともうす。また難思議往生ともうすなり。

親鸞がここに述べる自覚道、それは如来の本願を根拠とするという特質から、「本願一実の直道」と性格づけること



もできるし、また無上涅槃の証りに至るといふ点から、「大般涅槃無上の大道」と了解することもできるであろう。のみならずこの自覚道を『大経』の宗致とするのであるが、この『大経』の宗致について親鸞が最も力をこめて語る知見として、私は「証卷」結釈の次の顕開を挙げておきたい。

しかれば大聖の真言、誠に知りぬ。

大涅槃を証することは、願力の回向に藉りてなり。

還相の利益は、利他の正意を顕すなり。

〔真宗聖典〕二二九八頁

親鸞は往生について、かなり多くの箇所での見解を語り、しるしている。そしてその内容づけも、かなり幅広い。その中で、親鸞が真実教と顕揚した『大無量寿経』の教説によって得られたからこそ、敢えて「大経往生」と語ったこの往生理解こそ、親鸞が已証としてもった最も積極的な往生観である。ある幅をもって語られた往生理解の中の、一例ではない。最も基本的な往生理解であると、承知すべきである。親鸞の往生理解を正確に学び知ろうとするならば、親鸞が往生について語るさまざまな見解について、どれが基本的な見解であり、どれが教化の場などでの臨機応変といふべき見解の表明であるか、その語る見解の軽重と次第を、われわれは心して熟慮しなければならない。その意味で、親鸞の往生理解を正確に尋ねようとするとき、「大経往生」としてしるしたこの文章こそ、まさに依るべき親鸞の基本的往生理解の表明であると、承知すべきである。

さて、大経往生について親鸞がその知見を表明しているこの文章は、洗練に洗練を重ねた文章であり、いわば「往生観骸骨」とでもいえるような凝集感がつよい。その眼目というべき知見は、「念仏往生の願因により、必至滅度の願果をうる」にあると考えられるのであるが、このように語られる本願のはたらきの現実態が、「現生に正定聚のくらしいに任して、かならず真実報土にいたる」と示される生の歩みにはかならない。このようにしるす親鸞の大経往生を語る文章を読んで、私は二つのことに注意する。その一つは、この「かならず真実報土にいたる」としるされてい

るのが、いわゆる「往生」を語っていると了解されるのであるけれども、ことばとして「往生」を語ることはい度もなく、力をこめて語るのには現生正定聚であり、「無上涅槃のさとりを開く」に究竟する「かならず真実報土にいたる」もまた、現生での生の歩みであるということである。第二は、この独自の往生理解は、大経往生を語る文章の全体で示されているように、如来の二種の回向によって実現する往生であり、さらに「これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆえに」ということばが示しているように、ことに往相の回向という親鸞独自の知見に立つての往生理解であるということである。私は第二の視点がことに大切であると考えるので、この点から考察を進めていきたい。

往相の回向については、その知見を『浄土三経往生文類』と『如来二種回向文』に、いかにも凝集的に親鸞はしるしている。二文はほぼ同じ内容であり、『如来二種回向文』の方が簡潔であるので、これによってその要点を承知しよう。

往相の回向につきて、真実の行業あり、真実の信心あり、真実の証果あり。

真実の行業というは、諸仏称名の悲願にあらわれたり。称名の悲願、『大無量寿経』にのたまわく、「設我得仏 十方世界無量諸仏 不悉咨嗟称我名者 不取正覚」文

真実信心というは、念仏往生の悲願にあらわれたり。信樂の悲願、『大経』にのたまわく、「設我得仏 十方衆生 至心信樂欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覚 唯除五逆誹謗正法」文

真実証果というは、必至滅度の悲願にあらわれたり。証果の悲願、『大経』にのたまわく、「設我得仏 国中人天 不住定聚 必至滅度者 不取正覚」文

これらの本誓悲願を、選択本願ともうすなり。

この必至滅度の大願をおこしたまいて、この真実信樂をえたらん人は、すなわち正定聚のくらいに住せしめんと  
ちかいたまえり。  
(中略)

これらの大誓願を、往相の回向ともうすとみえたり。

〔真宗聖典〕四七六頁

『正像末和讃』に親鸞は二種の回向について、次のようにしるす。

無始流転の苦をすてて

無上涅槃を期すること

如来二種の回向の

恩徳まことに謝しがたし

〔真宗聖典〕五〇四頁

疑問の余地なく親鸞は、如来の二種の回向を「恩徳」と感佩している。それは世親の「回向為首得成就大悲心故」の教言、そして曇鸞の「若往若還、皆為拔衆生度生死海故」の教言に教示を得ての了解であることは、容易に知られるとおりであろう。その如来の往相の回向の恩徳を、具体的に衆生の上に現前せしめるものとして、親鸞はここに真実の行・信・証の三法を挙げている。のみならずこの三法は、それぞれ諸仏称名の願・念仏往生の願そして必至滅度の願を根拠として衆生に実現する法であると親鸞は了解し、この三つの本願のはたらきをもって、往相の回向であるとするのである。

ことに注意すべきは、必至滅度の願について、念をおすかのように親鸞が述べている見解である。同じ趣旨の文が『浄土三経往生文類』にもしるされているので、重ねてそれをみよう。

この真実の称名と真実の信樂をえたる人は、すなわち正定聚のくらいに住せしめんと、ちかいたまえるなり。この正定聚に住するを、等正覺をなるともたまえるなり。等正覺ともうすは、すなわち補処の弥勒菩薩とおなじくらいとなると、ときたまえり。しかれば『大経』には、「次如弥勒」とのたまえり。

〔真宗聖典〕四六九―七〇頁

『教行信証』で親鸞がより展開した形と内容をもって論述している往相の回向についての知見を、親鸞はここにあげ

た二つの論文では、きわめて凝縮した形で述べている。もとよりその見解の基本においては、いささかの相違もない。重ねていうまでもなく、如来の往相の回向の恩徳によって恵まれ実現するもの、それは現生に正定聚の位に住する生である。それを直接に実現する必至滅度の大願の現実態である真実の証果について、「証巻」がしるすその具体相を、重ねて承知しよう。

しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る。

〔真宗聖典〕二八〇頁

真実の証果が、「利他円満の妙位、無上涅槃の極果」といわれる無上涅槃の証得であることは、誰しもが承知しているところである。それを踏まえて親鸞は敢えて、その無上涅槃の証得に究竟する、往相回向の心行すなわち真実の行信の獲得に始まる現生の生の歩みを、いわば真実証の現実相として了解するのである。この文章はいかにも見事にその了解を語り表しているが、もとよりそれは親鸞の恣意的了解ではない。真実証の前提となる、真實行と真実信についての積極的瞭解に基づいて立てられた知見である。

真實行について親鸞は、「極速円満す、真如一実の功德宝海なり」という、驚くべき了解をもっている。浄土の不虛作住持功德の自証に立つてこの了解は、例えば『歎異抄』には「ただ念仏のみぞ、まことにておわします」との述懐としてしるされているのであるが、この了解が親鸞の仏教理解、すなわち大行に立脚する本願の仏道を敢えて「誓願一仏乗」と顕揚する、その根柢となっていることは、識者の共に認めるところであらう。だから親鸞は真実信心の積極的意味を、「真如一実の信海・証大涅槃の真因」と顕開してためらわない。この行信において、その回施が自証される真如一実の功德によって、衆生の流転する虚妄の生は転ぜられ、真実功德に依止する生、すなわち無上涅槃の証得に究竟する生が実現する、いやむしろ施与されるのである。このような生を、はやく曇鸞は「入大乘正定聚之数」と教示しているのであるが、それを受けて親鸞は「現生に正定聚のくらいに住す」というたのである。

これについて親鸞はさらに、「正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る」と述べていることに留意したい。同じ表現は、例えば『唯信鈔文意』には「煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり」と、またいまの「大経往生」では、「現生に正定聚のくらいに住して、かならず真実報土にいたる」と、反復しるされていることを、併せて想起したい。この「いたる」という表現は、明らかに生の歩みを示している。この正定聚に住した生の歩みを、親鸞は真実証の現実態とし、「大般涅槃無上の大道」と呼ぶのである。さらにこの自覚道をもって大経往生とし、難思議往生と呼ぶのである。

親鸞が了解し、表明し、教示する往相の回向は、このような自覚道を実現する如来の恩徳である。親鸞は一貫して現生正定聚を語り、必ず滅度に至る大般涅槃道を語って、例外はない。私は親鸞の往相の回向を語るこの教言を読んで、かつは瞠目の思いをもち、かつは眼を洗われる感銘が動くのであるが、往相の回向を顕開する親鸞は、ことばとしては「往生」を語ることではないのである。しかしながら小著『親鸞の信のダイナミックス』で検証したように、往相回向について一般にもたれている見解は、衆生を往生浄土せしめる如来の回向という理解であり、「私共が浄土に往生する一切の仕掛を、お与え下されることである」という理解である。私はこれらの見解に接して、率直に言えば、親鸞が往相の回向についてしるす文章を精読していないのではないかという疑問を感じざるを得ないし、当然のこと、この見解が十分に正確であり正当であるとはいえないのではないかという疑念も、動かざるを得ないのである。

のみならず、もし往相回向を通説のように、衆生を往生浄土せしめる如来の回向と理解するならば、逆に親鸞にしたがって往生浄土を了解しようとするならば、それは必ず往相の回向についての親鸞の知見を踏まえてなされなければならないとするのは、理の当然であろう。しかしながらこの当然の視点が欠落し、往生が議論されるとき、往相の回向という知見が視野の中に入らないで、往生が往生だけで議論されているのが実際ではなからうか。『浄土三経往生文類』が大経往生について述べるとき、それが如来の二種の回向、ことに往相の回向について語りつつその論述を

展開していることは、われわれにこの反省を大きく促すものである。

#### 四

大経往生について、『浄土三経往生文類』に親鸞はこうするす。

念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。

親鸞の本願理解の特徴は、本願を因位の願心において了解するだけでなく、むしろその成就の事実において了解する関心がつよいことは、すでに周知されていることである。そのように、ここの念仏往生の願についても了解すべきであるが、この願の成就の事実は、当然それに先立って諸仏称揚の願成就の事実を前提としている。果たして親鸞は『浄土三経往生文類』に、この文章に続いていまの二つの本願の成就を、一つの事柄として次のように引文する。

称名信楽の悲願成就の文。『経』に言わく、

「十方恒沙諸仏如来、皆共讃嘆無量寿仏威神功德不可思議。諸有衆生、聞其名号信心歡喜乃至一念。至心回向、願生彼国、即得往生、住不退転。唯除五逆誹謗正法。」文  
(『真宗聖典』四六八頁)

『大経』のこの教言に対する歴史的証言というべきものが、『願生偈』第一偈の美しい表白であることは、識者の広く承知するところである。そうすると、親鸞が選択本願の行信と性格づけた、世親表白の、世尊の『無量寿経』の教説に賜わる一心帰命し一心願生する本願の信こそ、ここにいう念仏往生の願の現実態であり具体相であると、了解すべきであろう。この本願の信を因として現前するもの、それが必至滅度の願の成就としてある自覚道であるという。大経往生について述べる親鸞は、この願の因位の願心を表す教言とともに、その成就を語る教言を併せ引く。

必至滅度・証大涅槃の願成就の文、『大経』に言わく、

「其有衆生、生彼国者、皆悉住於正定之聚。所以者何、彼仏国中無諸邪聚及不定聚。」文

また『如来会』に言わく、

「彼国衆生、若当生者、皆悉究竟無上菩提、到涅槃处。何以故、若邪定聚及不定聚、不能了知建立彼因故。」

（『真宗聖典』四六九頁）

必至滅度の願成就の文における「生彼国者」については、この『如来会』の「若当生者」という教言により、さらに『一念多念文意』に「文のころは、それ衆生あつて、かのくにうまれんとするものは、みなことごとく正定の聚に住す。」と解説している点を併せ考えて、親鸞は現生において願生道に立つた者と了解していたことは、ほぼ議論の余地なく明らかであろう。これらの教言に決定的な教示を得て、親鸞はこの必至滅度の願に根拠をもつ真実証の現実態を、すでに幾度か引いたように、「証卷」において、往相回向の心行の獲得による現生に正定聚に住する生の実現、およびその正定聚の機に生きられる涅槃無上道に立つた生の歩みと、顕開したのである。この知見が大経往生を述べる中で、「念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり」と示され、さらにその現実態として、「現生に正定聚のくらしいに住して、かならず真実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆえに、無上涅槃のさとりをひらく。」という自覚道が、いかにも具体的に重ねて表明されているのである。

ここで親鸞が「現生に正定聚のくらしいに住して、かならず真実報土にいたる」としている点にも、一応注意しておくべきであろうか。それは『善性本御消息集』の「しのふの御房の御返事」と宛先のある書簡に、次の文章があり、それによるならば、往生は明らかに命終ののちであるという見解があり、それと同じように了解すべきではないかと、考えられるからである。

往生の心うたがいなく候うは、撰取せられまいらするゆえとみえて候う。撰取のうえは、ともかくも行者のはからいあるべからず候。浄土へ往生するまでは、不退のくらしいにておわしまし候えば、正定聚のくらいとなづけておわします事にて候うなり。

（『真宗聖典』五九〇頁）

「しのふの御房」からの質問をうけての返書と考えられる書簡であるが、だからこそここに示るされた見解をどこまで普遍化して理解したらよいか、よほど慎重な吟味が必要であるように思われる。ここで「浄土へ往生するまでは」といわれているのは、確かに今生の命終わるまでは、という意味であろう。文意はともかく明瞭であり、往生浄土の自覚が決定するのは、如来の摂取不捨の恩徳によるのであって、この自覚が念仏者のさまざまな分別を破って恵まれるのであるけれども、この自覚によって、現生のただ中に正定聚・不退のくうちに住するのであると、懇切に親鸞はしるしている。

『末灯鈔』第一通の書簡を、併せて考えてみよう。

眞実信心の行人は、摂取不捨のゆえに、正定聚のくうちに住す。このゆえに、臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心のさだまるとき、往生またさだまるなり。

〔眞宗聖典〕六〇〇頁〕

この二つの書簡の趣意は、ほぼ同じであろう。前の書簡によって、信心の獲得によって現生に正定聚のくうちに住するのであり、命終ののち浄土に往生して直ちに成仏するのであるとする見解があるけれども、果たして十分に親鸞の意趣に相応しているといえるであろうか。往生を命終ののちに実現するものと主張するところに、この書簡の主眼があるのではなく、摂取不捨の恩徳によって、現生に正定聚のくうちに住するものとなるというところに、その主眼があると読むべきであろう。それについて、例えば曇鸞が教示しているように、住正定聚は安楽浄土の徳として了解されるものである。それを眞実証についてすでに尋ねたように、眞実信心において自証されるところに親鸞の已証があることを、われわれは心をいたして承知すべきであろう。私はかつて曾我量深が、「安楽浄土の徳を信心の徳として奪い来たところに、親鸞聖人の面目がある」と喝破したことを、あらためて感銘深く想起するのであるが、いわゆる「往生成仏」を命終ののちに得るものとするのではなくて、現生に正定聚に住した生の歩みをもって往生の積極的内容とするとしたところにこそ、親鸞が力をこめて「大経往生」と顕開した、独自の往生理解の大切さが



あるというべきであろう。『大經』の願成就文の解説に託して、『一念多念文意』に親鸞が堂々と顕開した信念に、われわれは心して耳を傾けるべきである。

（至信心樂の願成就の文）

「即得往生」というは、眞実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御ころのうちに摂取して、すてたまわざるなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり。しかれば、「必至滅度」の誓願を、『大經』にときたまわく、（願文）。

（必至滅度の願成就の文）

この二尊の御のりをみたてまつるに、すなわち往生すとのたまえるは、正定聚のくらいにさだまるを、不退転に住すとのたまえるなり。このくらいにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆえに、等正覚をなるともとき、阿毘拔致にいたるとも、阿惟越致にいたるとも、ときたまう。即時入必定ともうすなり。（抄出）

（『眞宗聖典』五三五—六頁）

文意はまことに明瞭であつて、疑問の余地はない。これらの文章に一貫して語られている知見が、親鸞が往生についてもった基本的了解である。したがっていま尋ねている「現生に正定聚のくらいに住して、かならず眞実報土にいたる」も、この基本的了解に立つて理解すべきであろう。眞実報土については、すでに尋ねたとおりであるが、「眞実報土にいたる」とは、現生に正定聚のくらいに住することによって、無量光明土として体験される無上涅槃の世界に向けて決定された生の歩み、このように了解することが促されているのである。

五

大經往生を総説して、親鸞はいう。

大経往生というは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり。

「如来選択の本願」とは、『浄土三経往生文類』が諸仏称名の願・念仏往生の願そして必至滅度の願の三願をあげて論述を進め、『如来二種回向文』が「これらの本誓悲願を、選択本願ともうすなり」と明記していることから知られるように、親鸞が往相の回向の恩徳を現前せしめる本願と了解したこの三つの本願を指す。その願意、そのはたらしき、そしてその成就の事実の意味するところは、すでに尋ねたとおりであろう。

「不可思議の願海」ということは、「行巻」の結釈に親鸞が真宗の大綱を述べた次の文章を、直ちに想起させる。おおよそ誓願について、真実の行信あり、また方便の行信あり。

その真実の行願は、諸仏称名の願なり。

その真実の信願は、至心信樂の願なり。

これすなわち選択本願の行信なり。

その機は、すなわち一切善惡大小凡愚なり。

往生は、すなわち難思議往生なり。

仏土は、すなわち報仏報土なり。

これすなわち誓願不可思議、一実真如海なり。

『大無量寿経』の宗致、他力真実の正意なり。

（『真宗聖典』一〇三頁）

この「誓願不可思議、一実真如海なり」という知見は、「如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり」という知見と、よく響きあっているように思われる。「他力と言うは、如来の本願力なり」というのは親鸞の基本的了解であるが、その親鸞は曇鸞が「不虛作住持功德成就は、けだしこれ阿弥陀如来の本願力なり」と教示する知見を、熟知していたであろう。そして世親が『願生偈』に示したこの教説こそ、親鸞が本願との値遇として獲得した

本願の行信を、大乘の仏道を実現する自覚であるときわめて積極的に了解する、その独創的な知見を確立することを促したものであることは、すでに尋ねた。大行と顕開した称名を、「極速円満す、真如一実の功德宝海なり」とし、真信心心を「真如一実の信海なり」としているのは、この行信理解の表明にはかならない。共通して、行信を真如一実すなわち無上涅槃の功德の回施を自覚するものとし、本願の最も根源的なはたらきを、真如一実の功德の回施と了解していることは、一読すぐに分かるとおりでである。

本願の最も積極的なはたらきを、『願生偈』の不虚作住持功德を説く教言によって、このように真実功德の回施と了解したとき、親鸞はそれを「誓願不可思議」という独自の用語で語ることを、私は『歎異抄の思想的解明』以来、反復考察しかつ表明してきた。いまの「行巻」ではそれを「これすなわち誓願不可思議、一実真如海なり。『大無量寿経』の宗致、他力真宗の正意なり」と表明し、「大経往生」を語るところでは、「如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり」と示しているのである。如来の誓願を信樂する心に目覚めたとき、人は本願力すなわち不虚作住持功德のはたらきによって、真如一実の功德の回施にあづかり、煩惱の身のままにしかも一実真如の開示を恵まれるのである。そしてこの真実功德の回施によって自然に実現する真実功德に依止する生として、親鸞は正定聚を了解したに違いないのである。さらにこの正定聚に住した生の歩み、すなわち誓願不思議を信樂するところから始まる生の歩みを、「証巻」が真実証の現実態を語るその知見と完全に対応しつつ、誓願に帰入した端的の体験である「回心」に始まる自覚道として、親鸞は『唯信鈔文意』に力をこめて顕揚するのである。感銘深い表明であるから、反復を厭わず重ねて引いておきたい。

ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上涅槃にいたるなり。

このようにして、他力すなわち如来の本願力によって実現する、現生に正定聚に住した生の歩みを、親鸞はいささ

かのためらいもなく、大経往生と呼び、難思議往生として頭揚したのである。それを敢えて「往生」と呼ぶのは、他力に帰した信心は実は浄土の功德を自証するような自覚であり、その信心に始まる正定聚に住した生の歩みは、実はその信心に自証される浄土の功德を行証しようとする志願に立った自覚道であるにほかならないからである。そしてよくよく考えてみると、実はこれが、親鸞が「かならず真実報土にいたる」と示した、往生の一道に立った生の、重厚な内実なのではなからうか。親鸞はこの知見を、「証卷」および『浄土三経往生文類』に、現生に正定聚に住した生とはどのような生であるかを示す文脈の中で、浄土の莊嚴功德を語る『論註』の教説の中から、四種乃至は五種の功德を引くことによって、示唆的に示していると私は了解するのである。しかしながら、指定された枚数をすでに大幅にこえてしまった。このことの考察のすべては、近著『往生そして浄土の家族——願生浄土と現生正定聚——』にゆずるほかはない。ご披見を賜わるならば、まことに幸いである。

私は仏教の長い歴史をとおして、命終ののちに実現するものと理解されるのがほとんどであった「往生浄土」を、大経往生といい難思議往生として、信心の獲得によって実現する現生に正定聚に住した生の歩みと頭揚した親鸞の「仏道としての往生」観に接して、その高邁な知見に大きな激励をいただくものである。